

できすぎくん誕生物語

— 山のため、地域のため、子供のため —



できすぎくんは、日本の山を甦らせようと、研究者・NPO・建築家・製材・加工業者と一緒に、特殊に開発、加工した杉のスリット材です。

その誕生には、間伐材と伝統技術を生かすための、人知れぬ苦勞がありました。

九州の山をまもるため

小国杉・飼肥杉に代表される九州の杉。江戸時代から本格的に造林が始まり、軽くて樹脂分が多いため、水に強く浮きやすいという特徴があり、船の用材（弁甲材）として、船大工の技術とともに大いに栄えました。

しかし、時代とともにFRP製の船が増え、木造船の需要が減り、杉の活用が衰退していきました。



杉のパワーを生かしたい

一方、長年大阪でシックハウスのお医者さんとともに健康にいいインテリアに長年取り組んできた藤田佐枝子さん（左写真）。

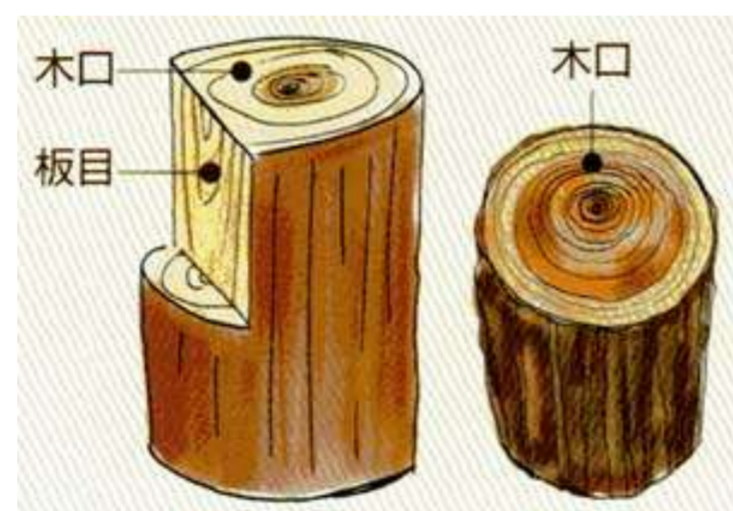
彼女は内装に杉をたくさん使ってきた経験から、「杉には、特に樹脂分の多い九州の杉には、何か人間にいいものがある」ということに気づきました。そして約10年前、杉の効能を最大限活用するためのスリット材を思いつきました。

「できすぎくん」の誕生です。

通常、家の内装や家具に使われる板は、木の繊維と平行な「板目」を表にしています。しかし、木の繊維と垂直な「木口」面の方が、木の呼吸量が4倍以上あるのです。これは、水分の通り道である「仮道管」が輪切りにされ、室内の空気に直接露出するためです（右上写真）。

約7ミリの溝を規則正しく入れることによって仮道管をたくさん露出させ、有害物質の吸収・リラックス成分の放出をする機能を杉に与えたのです。

一方、木材の研究で名高い京都大学生存圏研究所教授の川井秀一先生はこの杉のスリット材のあらゆる実験と考察を8年間続け、確かに、空気中の汚染物質の吸収と漢方薬的成分の放出をする杉の効能を木材学会で発表しました。





利益ではなく、社会の為に

スリット材を実際の形にするため協力してくれたのが、九州の杉に関わる人たちでした。停滞していた地元材の利用にもつながればと、このスリット材の開発に乗り出しました。

九州には、船大工以来の伝統的な木工技術や製材所のネットワークがあります。

うきは市で製材所を営む平川社長はこのスリット材のアイデアにほれこみ、3年間、試作品づくりを行いました。

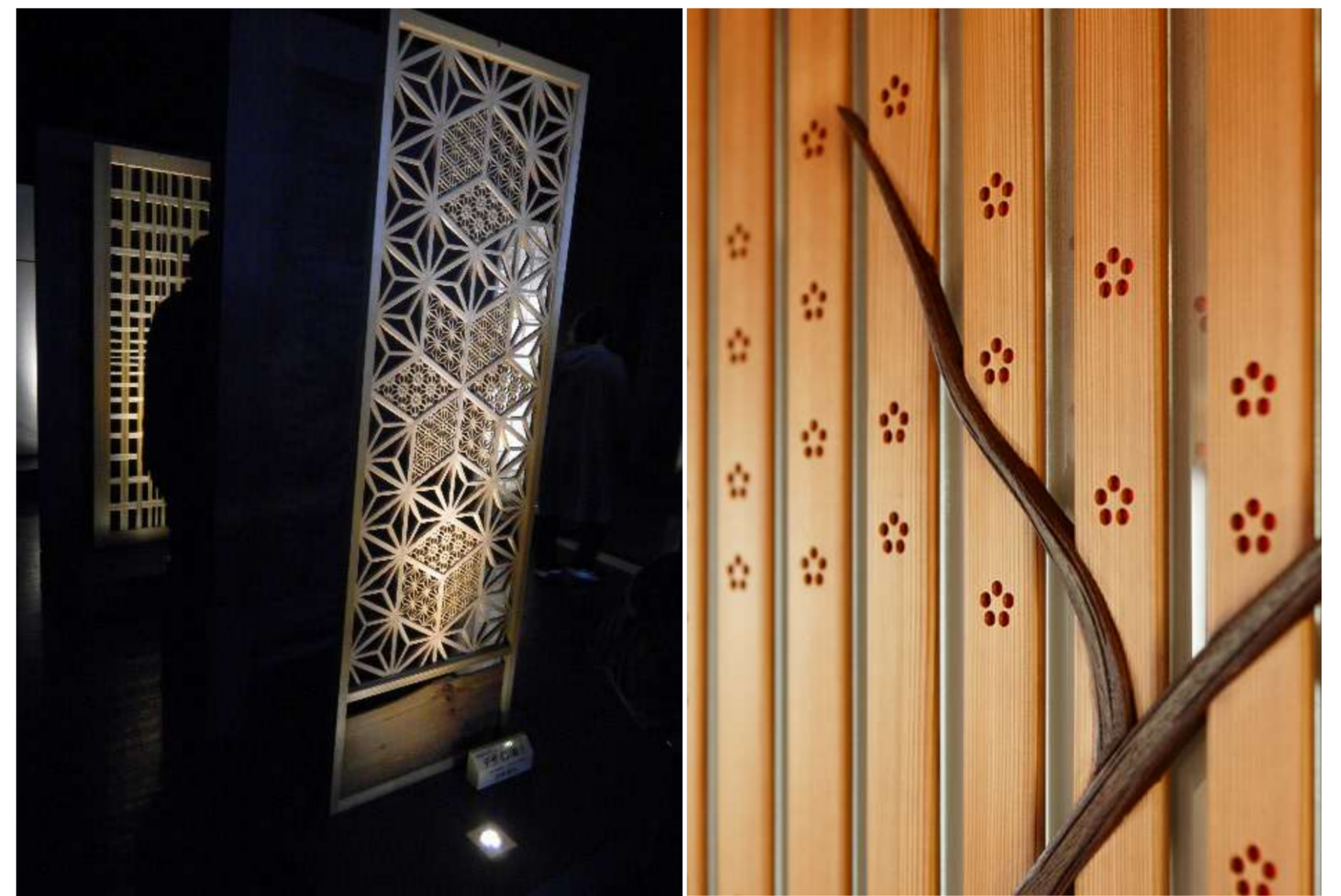
そして、とうとうスリット材の製品化にこぎつけたのです。

職人の技術を未来へ

製品化してしばらく経ったころ、「このスリット材を使って、衝立や建具もできないか」という話になりました。うきは市に近い大川市の阿津坂さんの登場です。

大川市は船大工を発祥とする木工業の盛んな地域で、今も家具や建具の一流の職人技術があり、全国的にも名だたる家具・建具の生産地です。しかし、ここも安い中国製品の攻勢で不景気でした。

大川市の植木市長のバックアップもあり、筑後川を守るNPOをやっていた阿津坂さんも、地域と山をまもるこのスリット材のコンセプトに共感し、ベッド・学習机・衝立・建具・犬の枕などスリットを利用した製品ができていったのです。



みんなの思い

東京でも長年活動していたNPO「緑の家学校」・(株)森上教育研究所がこのスリット材の普及を引き受け、PRや販売の窓口になりました。東京新ショールームは緑の家学校の設計施工で森上教育研究所内に2012年10月オープンしました。

ここまでみんなが一生懸命にかかわってきたのも、間伐材の利用を促進し、山を守り、地域の職人の技術をまもり、そして、スリット材をつかって室内の空気をきれいにし、住む人、特に、室内の空気に敏感な子供をまもるためです。

「空気清浄・リラックス効果で子供の頭がよくなる！」つまり、スリット材にかかわるみんなの気持ちから「できすぎくん」というかわいい名前がついています。

